

# 適性検査Ⅰ

## 注意

- 1 問題は**1**のみで、五ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時三十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、**解答用紙**だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 **受験番号**と**氏名**を問題用紙・解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

西武学園文理中学校

受験番号	氏名

問題は次のページからです。

1 文章1 と 文章2

を読み、あとの問題に答えなさい。

(※印の付いている言葉には、本文のあとに「注」があります。)

文章1

本を読むってなんなのでしょう。本を読む意味、おもしろさとはなんなのでしょう。そして、本は何のために読むのでしょうか。私は、生徒に「何のために本を読むの？」と聞かれたら、「自分のために読むんだよ」と答えています。

日本は豊かになったと言われていますが、本当にそうでしょうか。※一億総中流と言われた一九七〇年代は、会社に就職すれば一生その会社で働き、老後は年金をもらえる時代でした。が、現在では高学歴であつても就職が厳しい時代になり、社会保障もままなりません。この生きづらいつわられる世の中だからこそ、自分の考えを持つことが必要です。あなたの人

生はあなたのものです。誰だれのものでもありません。自分を助けられるのは自分です。まずは自分のために、生きる力をつけるために、ぜひ、本を読んでほしいのです。

※松下村塾を開いた幕末の偉人いじん、※吉田松陰の名言のなかに、「今日の読書こそ、真の学問である」があります。

日本人は「読む」という文化を昔から大切にしてきました。本を通して時間や空間、国境などあらゆるものをこえて人に出会える、感情に出会える、歴史に出会える、文化に出会える。そして、そのことについて考える。あなたは、なんのために、本を読むのか考えたことがありますか？勉強になるから？いい学校に入るため？それもあるかもしれない。でも、それだけでしょうか。

なんのために、本を読むのか。もう一度考えてみませんか。繰り返しになります。一番は「自分のため」です。

本はあなたにいろんな感情あつを与えてくれます。ワクワクしたり、ドキドキしたり、悲しくなったり、怒りいかを覚えたり。実際の人生の何倍もの経験が、あなたに豊かな時間や感情を与えてくれます。あなたは知らず知らずのうちに、人生のレッスンを受けています。

本の読み方に、正解はありません。本はあなたの気持ちに寄り添そって、新しい発見を与えてくれます。そういう気持ちを持てるのも、私たちが人間だからです。

本を読んでいて、「なんだか楽しい！」と思えたら最高です。読書はス

ポーツと同じ。読めば読むほど読むのが早くなるし、読むことに慣れていきます。

本を読んでいくうちに自分の言葉や考えを持てるようになります。先人たちの言葉があなたの考えを支えてくれます。そう、あなた自身で見つけていくことができます。

きのしたみちこ  
(木下通子「読みたい心に火をつけろ！」による)

〔注〕一億総中流——一九八〇年代の安定成長の時代に日本人がもつていた自分が上流階級でも下流階級でもないという意識。

松下村塾——吉田松陰の教えを広めた私塾。

吉田松陰——江戸時代幕末の教育者。

## 文章2

自分以外の人間もまた「自分」を持っている。

小説が僕や君に教えてくれるのは、そんな、単純そうでも単純でない、大切な真理だ。

人はどうしても他人のことを、「自分との距離」<sup>きより</sup>で見ってしまう。

相性がいいとか、悪いとか。あの人の気持ちが変わるとか、まったく理解できないとか。

しかし人間は、君との距離で存在しているわけではない。

どんな人間も、自分自身を出発点にしている。

その「出発点」を、小説は、常に複数持っている。たとえどんなに自己中心的な小説であっても。

書いている作者自身が、主人公以外の登場人物を、単純にしか考えていないような小説でさえ、思い入れは主人公にだけ向けなきゃいけない、なんてことはない。

すべての人間に自分という出発点があること、誰もがその出発点から、ほかのひととの距離を作っていること、自分だけが出発点の持ち主なのではない、ということ。

小説に複数の人間が現れる、それを読むことで、君は君という人間を、

それだけ大きく、幅広く、豊かにするのだ。

※<sup>りょうけん</sup>料簡の狭い人間は、自分のことしか見えていない。世界に「自分」というのが、自分が持っているこの自分しかないと思っている。

そりゃあ、どんな人間も「自分」を持っていると言われれば、誰でもわかるだろう。だけど実際には、人のことをそうは見えていない。

自分と比べて上か下か、自分に関係あるかないか、自分にとって有益かどうか、自分の考えで善か悪か。

人をそんな風に見られない人間は※<sup>きょうりょう</sup>狭量である。それは結局、自分分はどんな人のことも判断できるんだという、思い上がりと同じだ。

小説は、「世のため人のため」を、考えてもいいが、考えなくてもいい。世の中のことを考えたら、やっぱりやってはいけないことや、悪いに決まっていることをやるような人間も、小説には平気で現れる。

君が実際に、人に暴力をふるったり、人を差別したりするのでなければ、君は君の中に、冷たいもの、※<sup>おそ</sup>よこしまなもの、恐ろしいものを、持っている。いてもいい。

本当は良くないのかもしれない。心が冷たければ、温かくしなければな

らず、よこしまな心なんてものは潰して、なくしてしまわなければならぬのかもしれない。

でも自分で自分をごまかすのは、自分で自分を縮こまらせるのと同じだ。それを、誰にも吹聴したりせず、静かに自分の秘密にして、しかし自分には隠さないでおくこと。

それが君という人間を大きく豊かにする。

自分の中にみにくいものがあると認めるのは苦しい。小説を読むという経験は、決して君を甘やかしたりしない。

けれど、それは絶対に、苦しいだけの経験ではない。苦しさは、小説を読むという経験の、一部分にすぎない。

小説を読む経験は、君を慰めることもある。励ますことも、笑わせることもある。

④そういった、楽しい経験が、苦しい経験よりも劣っているとか、無駄だということとはまったくない。

ただ、読むという経験の過程で、苦しかったり、悩ましかったり、悲しかったり、つらかったりすることに出くわしても、その経験を放り出さな

いでほしい。君はすぐには気がつかないかもしれないが、その時、君は小説を読む以前より、ずっと深く自分を知っているのだから。

そして小説を読んで君が経験する「自分」は、君だけの「自分」ではない。

（藤谷治「小説は君のためにある」による）

〔注〕料簡——考えをめぐらすこと

狭量——人を受け入れる心の狭いこと

吹聴——ひろく言いひろめること。言いふらすこと。

よこしま——正しくないこと。邪悪なこと。

〔問題 1〕 傍線部の「生きる力をつけるために、ぜひ、本を読んでほしい」とありますが、筆者のいう「生きる力」とはどのようなものですか。

文章 1 の言葉を使い、三十五字以内で答えなさい。

〔問題2〕 傍線部①「そういった、楽しい経験が、苦しい経験よりも劣っているとか、無駄だということとはまったくない。」とありますが、それはなぜですか。文章2の中の言葉を使い、解答らんに合わせて書きなさい。

〔問題3〕 あなたは「本」や「小説」を読むことでどのようなことを得ることができると思いますか。文章1と文章2の内容と関連づけながら、三八〇字以上四二〇字以内で、書きなさい。ただし、次の条件と「きまり」にしたがうこと。

条件 次の二段落構成にすること。

①第一段落には、文章1と文章2で、それぞれ「本」や「小説」を読むことで、どのようなことが得られると述べているかをまとめること。  
②第二段落には、あなたのこれまでの経験を挙げながら、「本」や「小説」を読むことでどのようなことが得られるかについて書くこと。

〔きまり〕

○題名は書きません。

○最初の行から書き始めます。

○各段落の最初の字は一字下げて書きます。

○行をかえるのは、段落をかえるときだけとします。会話を入れる場合も行をかえてはいけません。

○、や、や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の文字と同じます目に書きます。（ます目の下に書いてもかまいません。）

○。と」が続く場合には、同じます目に書いてもかまいません。この場合、「。で一字と数えます。

○段落をかえたときの残りのます目は、字数として数えます。

○最後の段落の残りのます目は、字数として数えませんが。

